

写真新世紀

New Cosmos of Photography

2015 Vol.29

GRAND PRIZE 2014

Ayano Sudo

EXCELLENCE AWARD

Yoko Kusano

Asami Minami

Yosuke Morimoto

Yusaku Yamazaki

FINE WORKS

Sho Ishikawa

Naomi Inoue

Katsuhiro Okuchi

Ayaka Ota

Kazuhiko Kikuchi

Koichiro Kimura

Masato Koseki

Junichiro Sato

Yuka Tamura

Yuka Nakashima

Akinobu Nishimura

Marie Nosaka

Akira Matsumoto

Naoya Manabe

Taichi Maruyama

Daisuke Mimoto

Waka Miyata

Azusa Miyamoto

Hyogo Mugyuda

Hiroshi Yamauchi

PORTFOLIO
GRAND PRIZE 2013

Ikuro Suzuki

INTERVIEW
PAST WINNING WORKS

Yu Yamauchi

写真で何ができるだろう？

写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的としたキヤノンの文化支援プロジェクトとして1991年にスタートしました。作品のサイズや形式、年齢、国籍などを問わない公募形式のコンテストを実施し、写真の持っている新たな可能性を引き出す創作活動を奨励しています。

写真の誕生から170余年。デジタルカメラの普及などにより、今や誰もが気軽に写真を撮り、楽しむ時代となりました。絵画やイラストといった隣接ジャンルとも互いに影響を与え合い、写真表現の幅はより一層の広がりを見せています。写真を取り巻く環境が大きく変化していくなか、「写真で何ができるだろう？写真でしかできないことは何だろう？」を常に問い、写真界に新風を吹き込むクリエイターを応援してまいります。

「写真新世紀」は次世代の表現を切り拓く才能を発掘し、新人写真家が大いなる第一歩を踏み出すための「場」でありたい。私たちはそう願っています。

CONTENTS

- 2 2014年度(第37回公募)グランプリ
須藤絢乃 「幻影-Gespenster-」

2014年度(第37回公募)優秀賞

- 10 草野庸子 「UNTITLED」
16 南 阿沙美 「MATSUOKA！」
22 森本洋輔 「Yoyogipark, Shibuya-ku, Tokyo」
28 山崎雄策 「(佐藤 愛)」

2014年度(第37回公募)佳作

石川 翔／井上尚美／大口勝弘／大田綾花／菊池一彦／木村高一郎
小關諒人／佐藤順一郎／田村優佳／中島由佳／西村明展／野坂茉莉絵
松本 明／真鍋直也／丸山太一／見元大祐／宮田 若／宮本あずさ
麥生田兵吾／山内 浩

2014年度(第37回公募)優秀賞選出審査会 総評

大森克己(写真家)／佐内正史(写真家)／榎木野衣(美術批評家)
清水 穰(写真評論家)／ヒロミックス(写真家)

2013年度(第36回公募)グランプリ受賞者インタビュー

鈴木育郎 個展「SAIKA最果-Taste of Dragon」

2014年度(第37回公募)グランプリ選出公開審査会 報告

2008年度(第31回公募)佳作受賞者インタビュー

山内 悠「夜明け」

63 写真新世紀の歩み



2014年度(第37回公募)グランプリ
須藤 紬乃 Ayano Sudo
「幻影-Gespenster-」







2014年度(第37回公募)グランプリ

須藤 紉乃 Ayano Sudo

「幻影-Gespenster-」

ブック(270mm×360mm)／画材用紙にデジタルアーカイバルピグメントプリント／1冊、点数21点

私が持っていた「人生のイメージ」というものは、日常を平凡に過ごし、歳を重ね、少女がお姉さんになり、おばさんになり、果てはおばあさんになって、80年くらいは生きて、いつかは死んで行くのだらうなあ、というぼんやりしたものであった。しかし、歳を重ねて行く中で、どんなに恐ろしいものもイメージネーションの盾で守る事が出来た無邪気な少女時代は終わり、神頼みでは治らない病気がある事、おまじないでは人の心は操作出来ない事、そして最悪な状態を一変させる魔法は存在しないという現実を知った。それはかつて空想の中に生きる少女であった私には、本当に死んでしまいそうなほど苦しい洗礼であった。

死というものがありアリティを持って私の目の前に現れると、体の力は抜けて、手足は冷たくなって、この世の中から既に自分は消えてしまったかのような気分になった。わたしがかつて立っていた場所ももう其処にはなく、不安定で、全てがぼんやりと麻痺してしまっただ様な感覚に日々包まれていた。そのような時に、最寄りの駅の壁に貼られたたずね人の少女の張り紙を目にとめる事があった。彼女達の平凡な日常は何らかの理由によって絶たれている。彼女達には私の考える「人生のイメージ」が存在しないという事実。そ

こで時が止まったかのように彼女達は張り紙の中に存在している。彼女達に、自分の姿が重なる様な気持ちがあった。それまで想像していた私はもうこの世から居なくなってしまうていたから。彼女達も、かつての私の存在も、まるで幻影の様に、半透明なもののように思えた。そうして私は実在する行方不明の女の子達をモチーフにセルフポートレイトを撮ることにした。

様々な理由や状況の中で失踪して行った彼女達について、私は想像を巡らす事しか出来ないけども、ただ共通して言える事は、年齢も、容貌も失踪したその時から刻一刻と変化して行くのにもかわからず、私たちは、彼女達の当時のイメージをずっと探し続けているということ。仮に彼女達が今どこかで生きていたとしても、私たちが捜している彼女達のイメージは既に何処にも存在しない。

失踪した当時の年齢、髪型、服装、体型などを調べて撮影のための衣装を探す。もちろんその通りのものは容易には見つからない。その時の気分はまるで、自分が彼女達を街中で捜しているかのような気分であった。そして見つけ出した衣装で彼女達の格好をして、撮影をすると、自分が彼女達になってしまった様な錯覚に陥って、形容しがたい恐怖のようなものを覚えた。彼女達の無防備さや儚

い雰囲気を感じ、存在するけども存在しない人を演ずるという奇妙な体験は今まで味わった事の無い感覚であった。

私が、行方不明の女の子達をモチーフに制作をしているという事を人に話すと皆、怪訝な顔つきになった。私たちの日常は彼女達の事を話す事さえもタブーである。「光の当たらない少女達」そのような言葉が浮かんだ。しかし、彼女達は日常では気づかないぐらいの微量の光を放っている。遠い昔、失踪という現象を人々は「神隠し」と呼んだが、彼女達はまるで神の力を受けたかのような存在感を放っていると思ふ。私はそのささやかな光を感じ、それがより浮かび上がる様に写真に収める。写真の彼女達、あるいは私自身はその時、時間軸から外れ、永遠の存在になる。

私は写真を通して闇の中の微量な光を感じる事ができる。対象をじっと見つめる事が出来る。そして、生身の肉体は日々変化して行くのに対し、写された姿は不死である。写真に収めるという行為の中で、私は光を捜し、闇の中から抜け出そうとしている。

もし、突然私がこの世界から消えたとしても、私が世に出した写真は残る。それは私が感じている、滅び消え行く肉体への悲しみに対するの救いである様に思う。



須藤 紉乃

1986年 大阪府出身
 2009年 パリ、エコール・デ・ボザールに交換留学
 2011年 京都市立芸術大学大学院卒業
 2011年 MIO写真奨励賞審査員特別賞受賞
 2011年 美術作家、フォトグラファーとして国内外で活動

選者コメント 榎木野衣

単なるセルフポートレートではなく、実在したものの現在は行方不明となっている少女達の残されたデータ(髪型、服装、年頃、場所)をもとに作者自身がそれを克明に再現し、失われたその少女達になり替わって撮られた作品です。そこには色々な意味が含まれています。消えた少女達は老いることのない永遠の存在になったのに対し、作者自身は刻々と老いて容貌も変化していく。その埋まらないギャップを、消えていった少女達に扮することによってあらわにし、現在の日本の若い世代が持っている儚さ、危うさを実にうまく表現しています。写真史の流れでいうとシンディ・シャーマンという先駆者がいますが、それを日本の状況の中で消化しこの作者ならではの作品に仕上げています。冊子のデザイン、製本の仕方、紙の手触り等も非常によく練られている作品だと思います。



2014年度(第37回公募)優秀賞
草野庸子 Yoko Kusano
「UNTITLED」



2014年度(第37回公募)優秀賞
草野庸子 Yoko Kusano

「UNTITLED」

ブック/A5/150ページ/115点

私が今回作った写真集『UNTITLED』は私が福島から東京に上京してきてからこれまでの三年間撮りためてきたものです。なんてことないように過ぎていく毎日の中で起こる突拍子もないことだったり、楽しいこと、きれいなものだったりをコンパクトフィルムカメラを持ち歩き撮り続けてきました。

私が撮る写真の根底にあるのは、誰の家にも共通してあるであろう家族アルバムです。友達の幼い頃を全く知らなくとも、その子のアルバムをみると第三者である私にも、ああこれを撮ったお母さんは本当にこの子のことを宝物のように思っているのだろうなあ、など写真を見るだけでその時の感情や空気が想像できる、写真の内側まで考察したくなるというのはすごく面白いことであり、写真における強みだと思っています。

でも写真を撮るといのは、すごく楽しい瞬間を自分の目で見て楽しむのではなくファインダー越しに切り取ってしまうということであり、少し寂しく覚悟のいることだとも思います。

現在カメラの発達により写真はシャッターを押せば誰でも撮れるものになっています。それでもみんな全く同じにはならず、絶対に撮影者の、ファインダーをのぞいた人の感情が焼き込まれていると思います。

これからも私のタイミングで私にしか撮れない写真を撮り続けていきたいです。そしていつか私が日常に満足し、カメラを持ち歩くことがなくなったそのときに、今回の写真集『UNTITLED』に、はじめて何かタイトルがつけられるのではないかと考えています。



草野庸子

1993年 福島県出身
2014年 桑沢デザイン研究所三年在学中

選者コメント 佐内正史

なんか楽しそうで、気持ちがいい。若いって感じがする。小さくてこじんまりしているけれど、一点一点大きく伸ばしてみたらわかりやすいと思う。でもハレンチなのはいいね。





2014年度(第37回公募)優秀賞
南阿沙美 Asami Minami
「MATSUOKA!」



2014年度(第37回公募)優秀賞 南阿沙美 Asami Minami 「MATSUOKA！」

ブック/A3/インクジェットプリント/66点

事情とか、物語とか、気持ちとか重ねて何が写っているのかわからない写真はもうやめて、ただ写真で全部ぶっ飛ばすような写真が撮りたかったのです。それは、自分に対する写真反抗期みたいなものです。

写真を撮り始めたときは、私は自分の気持ちばかりで撮っていたと思うのです。もちろんそれが出発点であっていいし、その時にしか撮れない写真があったと思います。しかしある時から、もっと相手をよく見ようと思うようになりました。自分のことはいから、せっかく相手がそこにいるのだからじっと見る。そして、あっ、と思う瞬間がやって来たらシャッターを押す。その瞬間は、何か自分と相手をつなぐ棒みたいなものがスパーンと貫通して、その穴の中をすごく明るくて速い光が通って相手の顔にその光があたり、顔や姿がもっと見えて現れ、時計では計れない間隔で撮れば撮るほど濃く見えてゆくの。そしてそれは突然にふっと消えてしまう。そしてまた見たくなるのです。貫通の時のあの風みたいな光を知っているから。

先日、お盆でお寺に手を合わせに行ったとき、祖父の骨箱と久しぶりに対面しました。おじいちゃんはもういないのに、お骨がそこにあつてとても不思議な感覚になり、なんだか、“在る”こと自体に圧倒されてしまったの

でした。その感覚はとても写真的だった。どうしてなんだろうと考えました。それは、おじいちゃんの塊だったからなのではないだろうかと思います。私はここ1年くらい、写真において、意味から離れれば離れるほど、ただの写真になっていくのではないかと考えていました。ざるで漉すような感じです。そしてそのただの写真の、ぎゅっとした塊で、全部ぶっ飛ばしたいと思ったのです。

私はこの『MATSUOKA!』という写真を見せたくて見せたくて撮りました。MATSUOKAに、愛と敬意を持ってずきゅんずきゅんと撮りました。知らない誰かにも、会ったことのないヒーローみたいなものに、写真で会わせたくったのです。

松岡さんは、私の要望をほとんど聞いてくれて、全部やってくれました。文句や不満は一切ありませんでした。信頼してくれてありがとう。それを本当に感謝しています。

「ちょっと高いので怖いです」「ここはさすがに危ないです」という危険を感じる不安については私も、OK、じゃあ他にいい方法を考えよう、というやりとりはあったものの、「これちょっと恥ずかしいです」に対しては「大丈夫だよ」と一言返せば「わかりました。頑張ります。」と言って本当に頑張ってくれました。そうやって撮影していると色んな奇跡が

起きて、2人で喜びました。ちなみに撮影回数を重ねるに連れ、松岡さんの身体能力が上がっていくのも、何だかコーチのような気持ちになり面白かったです。戦っているけど、勝ちでも負けでもどちらでも良くなってしまような戦いであります。

MATSUOKAの姿を借りて、その輝く光景で、写真よ、写真の外に、やさしいパンチを上げて!と思いながら、私はもっと、また写真を撮っていきます。見えたもの、見たいものに執着してしまうから。消えてなくならなければ、そんなことはきつと思わないのに。目の前に現れる時間の上に乗った光景は、続きも見たいけど、留めてとっておきたい。見つけて、選んで、待ってた光景がやってきて、消えてしまつて、もどに戻れなくなり、次の場所へゆく。哀しくても、街や誰かの家ではブウとおならの音が聞こえる明るい世界。くだらないと素晴らしいは似ているし。今、世界の、時間の、どの辺にいるのかと徘徊しながら、でも確かに見つけたそこにあるものを写真に撮る。許して欲しいのだから、愚かさとかくだらなさを。写真で愛に変えて、大げさなことを言うな〜と、パンチしてほしい。意味などないただの写真だ!とかいいながらそんなこと思ってるなんて、写真はいつも矛盾していて恥ずかしくて愛おしいのです。



南阿沙美

1981年 北海道出身
2002年 札幌大谷短期大学美術科 卒業
2005年 個展「ホテイ」レドールカフェ 札幌
2006年 個展「あとは知らない」Galerie Juillet 東京
2006年 撮影企画「ラブユーシャッタープロジェクト」gallery micro 札幌
2007年 撮影企画「ラブユーシャッタープロジェクト第二弾」ATTIC 札幌
2011年 イノスタジオ勤務
2013年 個展「忘れたふりして」TOTEM POLE PHOTO GALLERY 東京
2014年 現在フリーランス

選者コメント 大森克己

モデルの人が魅力的で、生命力のある躍動感がとてもいい。人が生きることの素晴らしさと意味の無さを同時に感じられます。でんぐりがえった背中、片足をあげている写真など明るくて抜けがあります。いい意味で撮影者への意識がいかないし、写真家はどうでもいいんだ、世界がおもしろければと思えてきます。少し写真が多いので勇気をもって削ぎ落とせばもっと強い表現になると思います。



2014年度(第37回公募)優秀賞
森本洋輔 Yosuke Morimoto
「Yoyogipark, Shibuya-ku, Tokyo」







2014年度(第37回公募)優秀賞

森本洋輔 Yosuke Morimoto

「Yoyogipark, Shibuya-ku, Tokyo」

ブック/大四切/カラープリント/100点

初めて写真新世紀展を見たのは2006年度の第29回で友人が佳作を受賞したのがきっかけでした。翌年から自分も作品を応募するようになり、毎年出していたのですが落選していました。今年、キヤノンの方から電話があり「優秀賞に選ばれました。」と聞いたときは嬉しかったです。過去にもこれほどうれしかったことはないと思います。

90年代後半から2000年代前半の音楽や映画が好きで今でもその時に聴いていたバンドの新譜を買い、その時に見えていた監督の新作を見ることが多い。

それ以降のものが駄目でその時のものが最高ということではないのですが、たまたま自分が10代後半から20代前半の年齢で感受性が高く、影響を大きく受けたからだと思います。理解能力や解析力は向上すると思うのですが感受性は年齢とともに少なくなると思います。

10代後半から20代前半の時に付き合い合っている女性がいたのですが写真を撮ることなく別れてしまいました。写真を撮っていなかったことに少し後悔した気がします。その影響でその後、女性の写真を撮ろうと思ったのだと思います。彼女の家に行ったときに彼女と他の男と一緒に寝ていたことがありました。その反動もあつたかもしれません。

初めて女性に声をかけて撮影したのは代々

木公園でした。最初はなかなか声をかけることができず、ビールを飲んでから写真を撮っていました。200人ぐらい撮ったときにバイト先の女性と付き合い合うことになり、次はその女性の写真を撮りました。

3年間ぐらい撮っていたのですが別れてしまい写真を撮れなくなったのでまた公園や町で声をかけて撮るようになりました。今回の作品はここから撮影した写真が入っています。

最初に撮影した女性は一人で公園の芝生に座ってスタバのコーヒーを飲みながらiPadで音楽を聞いていました。平日の夕方他にほとんど人がいませんでした。その女性は少し暗い感じがしました。ただ声をかけたら写真を撮ってもいいよとってくれました。少し寒かったかもしれません。僕はビールも飲んでいなかったもので、気のきいたことも言えず、緊張して写真を撮りました。5枚ぐらい撮り、それでお礼を行って公園を出ました。ほとんど会話はなかったと思います。連絡先も名前も聞きませんでした。

撮った写真を現像しプリントしてみると、悲しそうな表情の女性が撮れていました。声をかけるときに「写真を撮っているのですが写真を撮らせてくれませんか?」と言って写真を撮らせてもらいます。声をかけても半分ぐらいは断られます。でも半分は撮らせて

くれます。撮らせてはくれるけど、僕があまり事情を説明しないで撮るので相手は不審に思います。ですが写真を撮られるからと女性はきれいに写ろうとします。その不安定な状態が別れるときに彼女が見せたものに似ているのかもしれませんが。実際には見たくない表情ですが、写真では見たい表情でした。

代々木公園、渋谷、吉祥寺、新宿、上野、原宿、下北沢と場所を変えながら撮影しました。一人の人に思い入れを持ちたくなかったので多くの女性を撮ってバランスをとっていたのかもしれませんが、彼女と似ている表情を撮ることで彼女の続きを撮っている感覚になっていたのかもしれません。

写真に撮り、写真を見ることで自分を慰めたかったんだと思います。無意識に断片を集めていくことで自分の本質が表れ、それは自分以外の人も共感されるものになると思います。

明確には分からないのですが、分からないことが重要だと思います。

写真にも全ては写らないし、余白が大事。コンセプトがあつてそれに写真がぶら下がっているのではなく、ただ写真がそこにあるだけ。あとは美しければそれでいい。説明はしない。これからもそうだ。



森本洋輔

1982年 香川県出身
2003年 日本写真芸術専門学校卒業
2006年 スタジオフォボス勤務
2010年 若木信吾氏に師事
2014年 フォトグラファーとして活動中

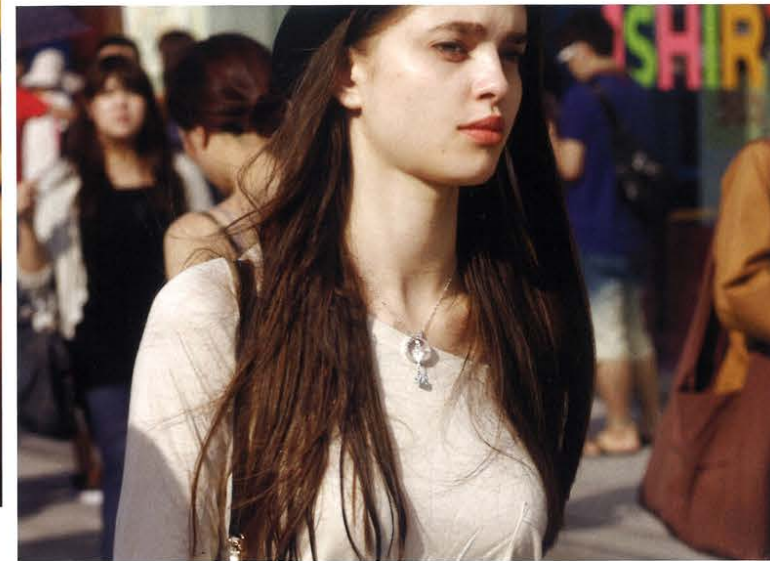
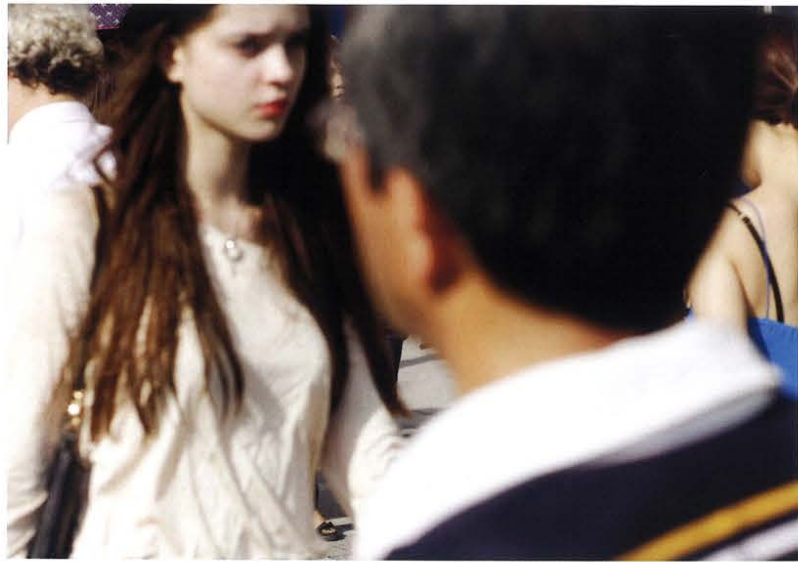
選者コメント ヒロミックス

まず東京の中心という都市感が良いですね。それから世の中の既存概念にとらわれず色々な感じの女性が写っています。一見いわゆるポートレートですが、よく見ると被写体が全員うっと半分泣きそうな顔をしていることに気がきました。写真の一番大切なことは、言葉にならないから写真に残す。まさに言語化出来ない感情を写真にしています。被写体はおそらく街でスカウトされプロではないので撮影してもらって皆感動しているのか? 真相は分からないですが……ものすごく感情的ではないし派手でもないですが、ハッとするような感覚。眺めていると女性っぽい、都市っぽい、そして写真っぽいと改めて思わせてくれます。説明出来なさがすごく感覚的です。左脳の写真の解釈、手法が流行っていますが、本来は写真ってこっちなんですよね。





2014年度(第37回公募)優秀賞
山崎雄策 Yusaku Yamazaki
「(佐藤 愛)」



2014年度(第37回公募)優秀賞

山崎雄策 Yusaku Yamazaki

「(佐藤 愛)」

ブック/B4/インクジェットプリント/32点

(佐藤 愛)についての覚え書き

1. 顔を撮る

一眼レフに85ミリのレンズを装着して交差点に立つ。通行人がこちらを向いた「顔」を撮るのにはやり方がある。カメラを構えて手を振りながら近づいていくのだ。見るからに怪しい。大抵の人は「顔」を伏せるか、眉をひそめる。しかしそうして派手なアクションをとれば、撮られたくない相手を写さなくてすむし、一日何千枚も撮影していれば一人くらいはカメラを見つめ返して微笑んでくれる人がいる。二年間毎日のようにそれを続けた。PCに貯まった数十万枚の「顔写真」を前に少し立ち止まる。そもそも自分はなぜ「人の顔」を撮り集めているのか?この執着はどこからきたのだろうか?

2. 顔を並べる

振り返ると、自分は「顔」とは特殊な付き合いをしてきた。卒業アルバムの制作会社で6年間「顔」に囲まれて過ごしていたのだ。学生の個人写真は、年齢、背景、髪型、服装、表情が統一されていて、個性は「顔の形」にしかない。ずらりと並んだそれらは「顔のカタログ」のようで、眺めているとゲシュタルト崩壊が起こり、肉の粘土でできた塊にすら見えてくる。みるみるうちに「人の顔」を「形」として見る目が鍛えられていった。そ

して、その自分にとってただの「形」であるそれらが、生徒の手に渡ると「宝物」に変わる事に関心を抱く。「顔」を認識するという事は、どういう仕組みなんだろう。

3. 顔を考える

(佐藤 愛)の制作は以下の3つの考えから着想した。

①人間の脳は普段「顔を見る」という行為を無意識に処理している。では連続して変化する「誰のものでもない顔」を認識しようとした時、なにが起こるのだろうか。

②「顔」に対するプライバシーの重視が進み、「他人の顔を眺める文化」が縮小している。写真美術館の壁に「誰のものでもない顔」を投影することは、その現状に対してのアンチテーゼとして機能するのではないか。

③単純に「顔」は「視覚の快楽」だ。ひたすら「誰のものでもない顔」がループするのはゾクゾクするしどこか心地良い。それを共有する事はできるのか。

4. 顔を作る

制作の場を路上から自宅へ移す。「顔」を粘土のように変形、またはモンタージュして「誰のものでもない顔」を作り上げてゆく。まぶた1つに1日かかる事もあれば、数時間で1人の顔ができる事もある。「こういう顔にしたい」と決めて作業にかかっても、その通りには出

来ない。「顔」には不思議なルールがあって、それに引っ張られる形で変形してゆく。制作の主導権は「顔」にあつて、自分でもどう着地するのか分からない。思いもよらぬ「顔」が出来上がるので自分でも恐ろしい。

5. 顔を映す

写真美術館への搬入で巨大な(佐藤 愛)の「顔」を投影した時、自分の意図を超えたものができた気がした。現れては消えて……を繰り返し、電源を消したらただの白い壁になってしまうプロジェクターの光の頼りなさは、(佐藤 愛)の存在感そのものだった。(佐藤 愛)は「空っぽの容器」のようで不気味だった。実在した「誰かの顔」が「誰のものでもない顔」へ変わった時、なにが残り、なにが抜け落ちたのか。そしてその隙間には、なにが入ってくるのだろうか?

制作意図

被写体の女性達はこの世に実在しません。これらは画像処理によって作られた、架空の女性達です。連続して同一人物を撮影したのも、それぞれ微妙な差異を持たせた別人として作られており、オリジナルのもの入っていません。(佐藤 愛)というは20~30代の日本人女性に最も多い名字と名前を組み合わせたものです。



山崎雄策

1984年 千葉県出身
2012年 春まで卒業アルバム制作会社に勤務
退職後、本格的に写真を用いた作品制作を始める



選者コメント 清水 穰

佐藤愛とは、写真に写っている女性の設定世代に一番多い名字と名前、何千何万もいるプロトタイプです。その誰でもあつて誰でもない女性(人工的に合成されたCG)を、ベアト・ストロイリのようなスタイルを借りて、シークエンスで撮る。シークエンスというスタイルを逆手にとって、同じ女が繰り返えし現れるはずなのに、微妙に顔が違うので「あれ?」と思い、時にはあからさまに違っているので目を疑う、そこが可笑しい。同一人物と思わせて肩すかしを食わせる。スタイルが要請する同一性を、人工の被写体が裏切る、と。実力のある人です。



石川翔 Sho Ishikawa
「キャッチャー・イン・ザ・ダーク」
the CATCHER in the DARK
ブック/A3ノビ/インクジェットプリント/18点

制作意図

1. 長時間露光とストロボ光を使って、複合的に風景を捉える試み。
2. ストロボは高さ3メートルほどに設置し、光が回るよう工夫した。
3. 何が写るか分からない暗闇の中で、写真の細部再現性と偶然性を頼りに撮影した。

選者コメント 榎木野衣

典型的な郊外のマンションのすぐそばにありながら、人里から縁遠いジャングルのように繁茂する未知の自然を深夜に冒険するように撮った写真です。都市と大自然はまったく無縁のようであり、実際にはその境界を真近に接しており、誰知らず荒々しく、傍らでやりたい放題を繰り広げています。その、見てはいけない儀式のような世界に、勇気をもって足を踏み入れ、果敢に撮るといふ、どこかドキキさせる写真になっています。



井上尚美 Naomi Inoue
「あまくもの」
AMAKUMONO
ブック/B2/インクジェットプリント/36点

制作意図

「あまくもの はるか遠くへゆく鳥に
平和を運べと願いをたくす」
この短歌は、私が阪神淡路大震災の直後に詠んだものです。あれから20年。あの時歌で詠んだ願いを、今の思いと重ね合わせ、今度は写真で表現しました。

選者コメント 佐内正史

写真が大きくて気持ちがいい。タイトルは和のイメージで、これもキレイです。鳥とか木なども上手に撮れているし、硬くなくて、自由な感じがする。場所を写したというよりどこかへいつちゃった感じがする。



大口勝弘 Katsuhiko Okuchi
「MIZO」
MIZO -gutter-
プリント/A1ノビ(610×914mm)/インクジェットプリント(厚手光沢)/30点

制作意図

「小人(こびと)になってミクロの世界を冒険したい」
そんな子どもの頃の夢を写真で表現した。

『溝』は小人の目線になることで「秘境」へと姿を変える。普段気にも留めない所にこそ、人を感動させる世界はある。

選者コメント ヒロミックス

色を派手に加工している部分などは私の好きなテイストではありませんが、無邪気で童心に帰ったような感覚でワクワクしながら撮影しているのが伝わります。いわゆる既視感があるのが残念ですが、おやゆび姫とか一寸法師になったような感覚でなかなか楽しめます。



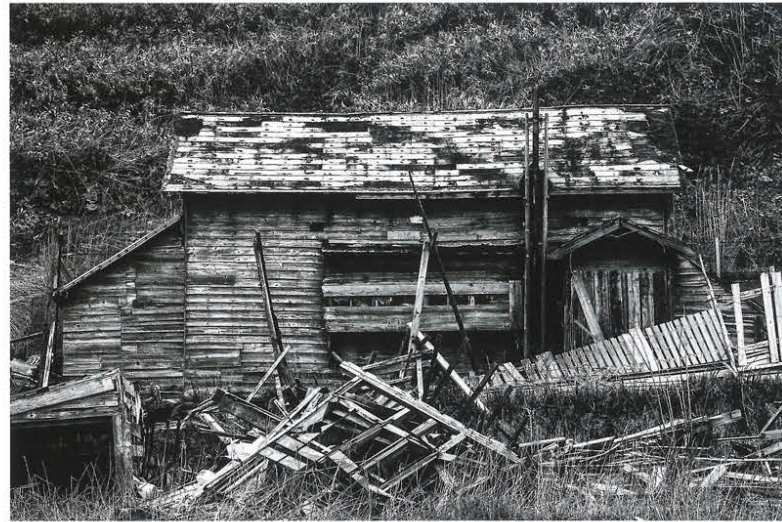
大田綾花 Ayaka Ota
「18歳の大人達」
ブック/インクジェット/42点

制作意図

昔から自分の容姿に自信がなくて
写真に写ることも拒んでいた
そんな私が自己表現として始めたことは
「彼女達に自分を映す」ことだった
彼女達は全て彼女達自身でもあり、全て私でもあるのだ

選者コメント 佐内正史

写真がデカイといいですね。可能性を感じます。



菊池一彦 Kazuhiko Kikuchi

「真珠色の革命時代」

Pearl Light of Revolution

ブック/A4/インクジェットプリント/25点

制作意図

北海道西海岸にはかつて鯨漁で使われた建築物が多数点在している。一部は保存されているが、殆どの建築物は朽ちるに任されている。沿岸を歩き、これらの建築物を記録する撮影を行った。

選者コメント ヒロミックス

家が喜んでいる感じがしました。海辺の潮風で老朽化していますが、とても素敵で住んでみたいと思わせる。漁をして闘ってきた男たちのロマンも感じます。それも言語化できないものを写真に捉えている力強さ、切なさにハッとさせられました。プリントもきれい。



木村高一郎 Koichiro Kimura

「ことば」

words

ブック/A4/インクジェットプリント/50点

制作意図

他人の家を覗き込んでいるような、見守っているような、絵本を見ているような、そんな写真になればいいな。この写真を見て、ふと何かを思い返す、何かを思い描く、そんな作品を作りたいかった。

選者コメント 榎木野衣

三人家族が布団の上で繰り広げる生活の悲喜こもごも。布団と言えば当然、夜、睡眠をとる場所ですが、実際日本の家庭では、布団の上は睡眠のみならず団らん、勉強、運動、食事、読書、娯楽など、色々な機能を果たす複雑な場になっています。布団の上でひとつの家族がくると変化する様が固定された天井から容赦なくとらえられていて、言葉のないコミュニケーションが言葉以上の役割を果たしている様が「川文字」のように見えるということなのではないでしょうか。タイトルにも感心させられます。



小関諒人 Masato Koseki

「魚」

FISH

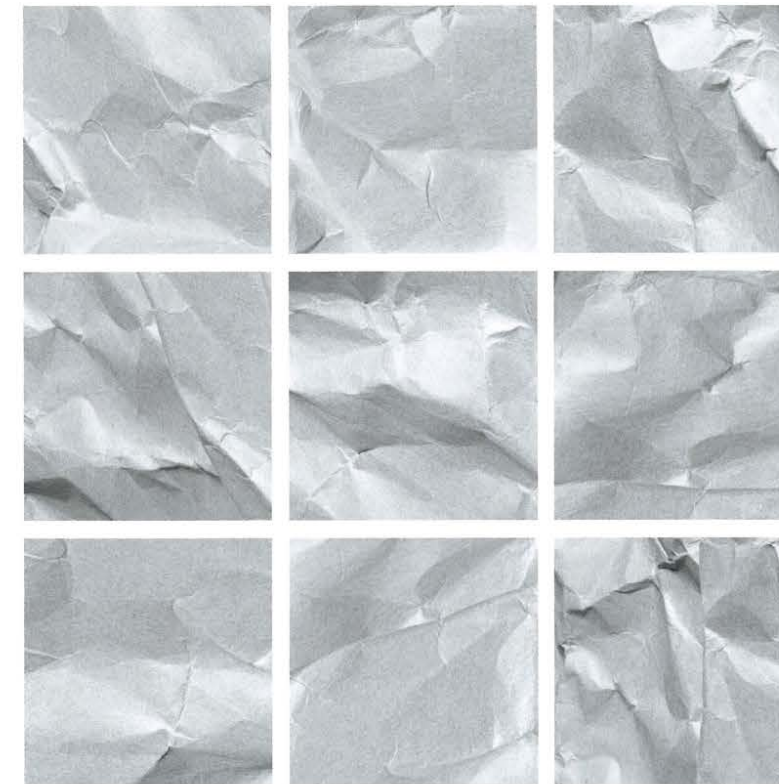
プリント/B2/インクジェットプリント/21点

制作意図

この写真に写っているのは水槽と、水面と、死んだ魚だけです。ある日、私が小さい頃夢中になって収集した切手の中に、魚の絵が描かれた切手を見つけました。その切手の長方形の区画は、魚を生かしておくための水槽を連想させました。そういった小さな発見をリアリティを持たせ再現することに私は、物を作る意義を見出しています。

選者コメント 清水 穂

「日本の魚」という切手に見立てた水槽と魚(剥製、死骸)の写真。わざわざ切手の図案に合わせてトビウオを飛ばせたり、鰻を泳がせたり、その発想の元が切手なのが面白い。ある種バカっぽいですが、明快で単純なことをしています。削ぎ落した仕事ができる、ということは他の仕事もできるはずで興味が湧きます。



佐藤順一郎 Junichiro Sato

「CONTINUUM」

ブック/A4/フィルムスキャニング・インクジェットプリント/45ページ

制作意図

私は写真で、意味を組み立てようとはしません。見ることに對して、なるべくニュートラルであろうとします。曖昧さや、複雑さを伴いつつ現れた写真を前に、はじめて写真なるものについて繰り返し考えます。

選者コメント 大森克己

人間が住んでいる世界をしっかりと観察していてその観察眼の真つすぐさがとてもいいですね。そして自分が見た世界をきちんと分類しています。その方法の丁寧さがいいし、カラーとモノクロが混在しているのもいいと思うのですが、ちょっと既視感があります。その理由を考えてみてください。



田村優佳 Yuka Tamura

「カドラージュ」

framing
ブック/A4/ネガフィルムから印画紙/40点

制作意図

他人の記念写真を見た時、その文脈が分からないがゆえに気持ちがざわざわする。世界を枠に切り取った瞬間から、世界を自分好みの額にはめた瞬間から、そのイメージは誰かに眼差(まなざし)され、新たな意味を纏い始める。

選者コメント ヒロミックス

好きなものを集めた写真。写真ってそもそも好きなものばかり撮るんですよね、と当たり前のことを思い出させてくれます。昭和なノスタルジー、手作りの暖かさ、手触りまで伝わってくるようです。近年の工業製品に囲まれた時代とは真逆の手作りが流行してますよね。マクロな女性の世界観という意味ではガーリーフォトという解釈でしょうか。



中島由佳 Yuka Nakashima

「FUGU」

ブック/A4/カラープリント/40ページ

制作意図

フグ屋のフグを撮りました。客寄せのための水槽ですが、お客さんがくると彼らはさばかれてしまいます。ぼけっとしているようで結構スリリングな毎日を送っているようです。

選者コメント 榎木野衣

何の変哲もない料理店のフグの活けすを日々撮り続けたものと思われます。「なぜフグを撮るのか?」という動機自体に強い関心が湧くし、フグという存在は人間を殺すほどの毒を持つ一方、どこかユーモラスで、こうして活けすに飼われ、日々料理され、消費されていく。そういう毒といやしの不思議な両立を考えさせられます。活けすに写り込んだネオン、繁華街、あるいは水槽の中の照明、ポンベの泡などが交り合い、とても幻想的な世界を感じさせますが、しかしどこか変哲のない飲み屋街であるという現実。通俗的な世間と野性が日常の中で入り混じる、存外に広がりのある作品だと思います。



西村明展 Akinobu Nishimura

「うずまき」

UZUMAKI
ブック/A4/95点

制作意図

自分を中心に、自分を取り巻く様々な人や世界がせめぎ合い、動いて、出会って、忘れて、また思い出して、僕は今日まで生かされてきました。これからもどうか、よろしくお願いします。

選者コメント 大森克己

みずみずしいものが入っていて、そこが素晴らしい。ただ本当にみずみずしいものと、カッコつきの「みずみずしい」があって、誰かによって作られた「若さ」のようなものを安易に信じているようにも感じます。作品を世に問う時には「自分」というものを一回疑ってみるというプロセスが必要です。



野坂茉莉絵 Marie Nosaka

「真夜中のマーチ」

Midnight March
ブック/A3プリント/26点

制作意図

日常の中にある美しい風景。見慣れた場所が区画整理により失われていく。未来を写し撮る数十秒間。写っていたのは過去の自分や子どもの頃の記憶。現在の自分は、変化への不安と名残惜しさから、光の軌跡となって失われる場所を彷徨っている。

選者コメント 榎木野衣

タイトル通り、真夜中に人気のない通りや空き家等に亡霊のように女性が現れ謎めいた所作を演じている写真です。寝静まった世界のように、実際には絶えまなく人の気配や蠢き、華やかさがあるのが夜です。それをあらわにするような「真夜中」にしかない喧騒感を、「マーチ」という言葉の響きにあるように、わずかだけ異世界へとずらして見せています。そのバランスが独特で見る者を引き付ける作品になっています。



松本 明 Akira Matsumoto

「Archetype」

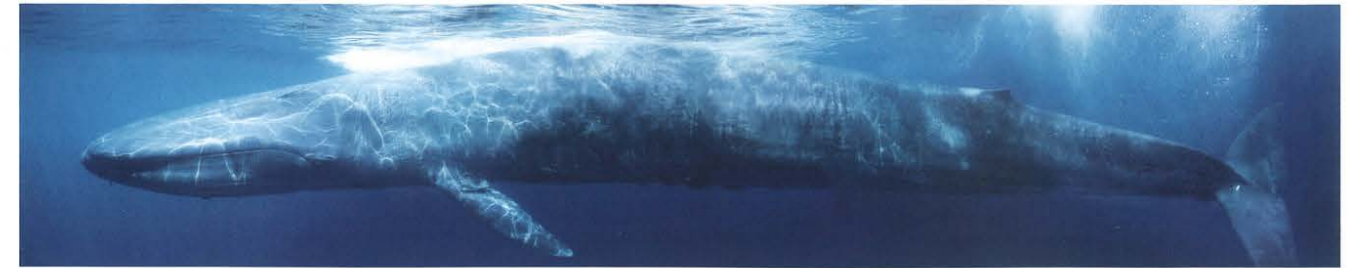
ブック/A3/インクジェットプリント/15点

制作意図

写真が事物を暗号化するプロセスについて考えています。

選者コメント 清水 穂

作品内のイメージを構成要素に分解した上でさらに再構成していく。一見自然な写真のようですが、写真中の遺伝子 (Archetype) のようなものが組み替えられた上でイメージが出てくる面白さがある写真。直近では、滝沢広に少し似ていますね。滝沢さんの場合は、写真の物質的条件やイメージの表層がメインとなる。松本さんの場合はイメージに含まれた遺伝子という様々な細部や要素の方に重きがあって、イメージの内部で勝負しているようです。他の写真も見てみたい。



丸山太一 Taichi Maruyama

「Life Size Blue Whale (1/10 scale version)」

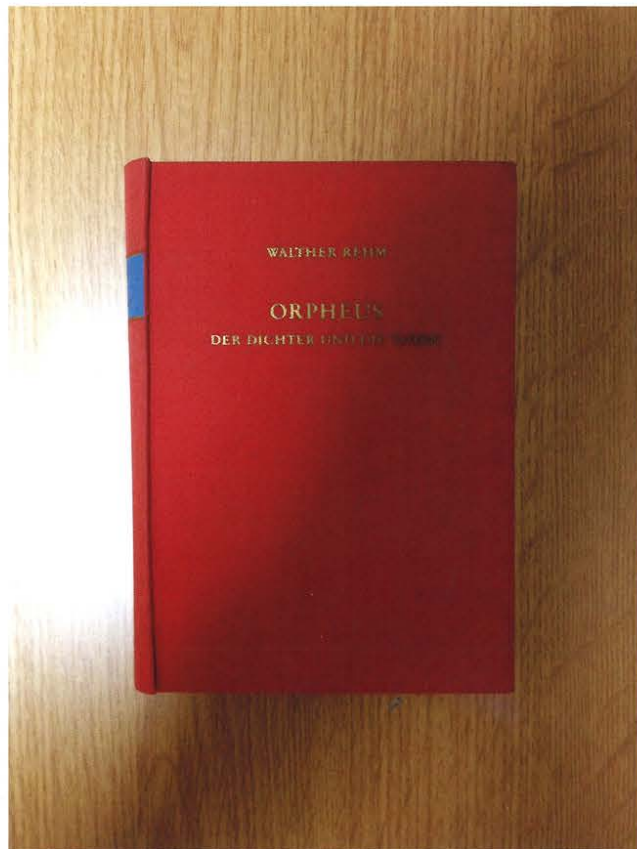
パネル/400×2000mm/ラムダプリント、FMプレート加工/1点

制作意図

実物大展示が可能なシロナガスクジラの全身合成画像を実物大の1/10に印刷したものです。今後、国内外の博物館・水族館・美術館などでの、実物大展示(20~30メートル前後)の実現を目指して活動しています。

選者コメント 大森克己

クジラの皮膚のディテールがとてもおもしろいですね。これは1/10のスケールということですが、実物大で見てみたい。尾ヒレの先まで見たかった。水の中の他のモチーフにも興味が湧きます。美しく写真の力量に可能性を感じます。



真鍋直也 Naoya Manabe

「人は風景の背景」

People as the Background of a Landscape

ブック/2L/インクジェットプリント/78点

制作意図

神保町の本屋に訪れては人を撮った。人間のタイプは千差万別なはずであるが、この森の中ではみな同じように見えた。その景色は異様なもので、もはや風景となる。人は風景の背景と化していた。

選者コメント 大森克己

一見、閉ざされた世界のように感じられるけれども、実は僕らの住んでいる都市そのもののように見えてきます。タイトルをもう少し考えてほしかった。このタイトルは作品が持っているポテンシャルを小さくしてしまっているように思えます。



見元大祐 Daisuke Mimoto

「母と息子」

Mother&Son

プリント/A3/ビ/インクジェットプリント/18点

制作意図

幼少期の子に母が触れることは最上級の愛情表現である。そのため成人男性が母と触れ合うことは、幼少期を男性自身に思い出させ、育ててもらった母の愛情を気づくことに繋がると考え、この制作に取り組んだ。

選者コメント 清水 穂

成人した息子と母親と一緒に撮るといって、どこかおぞましい写真です。人間図鑑の面白さで選びました。ただ、どの息子も母親も畳や床に座っており、ポーズも似ているので、もっと関係性や構図や状況にバラエティーがあれば良かった。まとめて見るとどうしても単調さが目に付きます。将来に期待。



宮田 若 Waka Miyata

「現し世」

utsushiyo

ブック/A3/Cプリント/39点

制作意図

私、そして行き交う人々
どこから来て、どこへ行くのか
その答えを問い続ける

選者コメント 佐内正史

シブイですね。ただ撮っただけという感じで迷いが無い。
そこがいいですよ。タイトルはよくわからないけれど、表現がストレートで気持ちがいい作品です。



麥生田兵吾 Hyogo Mugyuda

「主題『Artificial S.』」

ブック3冊/A4/インクジェットプリント/102点、全68ページ

制作意図

それを見つける時、それだけではなく、それとの間にある時間や空間、または言葉を見つけるでしょう。これは写真を撮りました。古い写真の写真です。これは見つけられて初めて写真です。

選者コメント 清水 穰

写真を撮るだけでなく、写真の見方を何通りも先読みして作っている。「犬」「塊」といった共通のモチーフによって、あるいは被写体ではなく幾何学的パターンによって、連鎖反応を起こす写真群と、それとは別に単独性の高い写真群があって、連鎖と独立のあいだで写真同士が綱引きしている。手が込んだ、考えられた写真集になっていて見応えがありますね。



宮本あずさ Azusa Miyamoto

「さるすべりと松」

saruberu to matsu

ブック/大四つ/パラライズ紙/25点

制作意図

おじいちゃんと二人でいつも通っていた道。
一人でたどっておじいちゃんの家に行った。
車庫にあったはずの車、いつも寄っていたガソリンスタンド、あったはずのものがそこからなくなっていた。

選者コメント 佐内正史

キレイに撮れています。重いか暗いかかそういう感じがなくて好きです。タイトルがいいですね。



山内 浩 Hiroshi Yamauchi

「いにしえみち」

An Old Trail

ブック/A4/インクジェット用和紙/30点

制作意図

熊野古道のルートの一つ、高野山と熊野本宮大社をつなぐ小辺路(こへち)の荒々しくも素朴な風景を、巡礼者や修験者の足で1200余年かけて踏み固められた道を歩きながら、眼の高さで撮りました。

選者コメント ヒロミックス

昔話を彷彿させるような、古来の美を尊重した水墨画のような写真です。奇抜さではなく暖かみなので写真を見ているとほっとします。マイナスイオンを感じますし、これからの時代はマイナスイオンが出ているような作品が流行ると思います。日本やアジアの美をテーマにしたものも今後国内外でより反響がありそうなので、それに向けて製作して行って欲しいです。

優秀賞選出審査会 総評

何でも写真になるんだな、と改めて感じました。そのこと自体は良いことだと思います。開かれているということだし、どんな形態の写真も存在し得るのだと思います。だからこそ美しい物事、「美」について自問してほしいと思います。そして歴史を意識してほしい。美術史、世界史、科学史など、いろんなことをやってきてボク達はここに立っている。人間はどのようなものを美しいと思ってきたのか。歴史を遡って今、人間にとっての新しい美しさとは何なのか考えてみてください。あともう一つ、自分の欲望に捕らわれすぎです。自分の欲望は他人の欲望。今の自分にのっかりすぎないように。組写真は冗長すぎます。写真のセレクト、編集が甘い。いい写真があっても水増しにより魅力半減。一つひとつの写真を丁寧に作り上げて無駄をそぎ落としてください。

大森 克己 (おもり かつみ)

写真家。1963年生まれ。1994年度(第9回公募)写真新世紀優秀賞(ロバート・フランク、飯沢耕太郎選)。2013年「日本の新進作家 vol.12:路上から世界を変えていく」(東京都写真美術館)出展。2014年個展"sounds and things" (MEM)を開催。主な写真集に『サルサ・ガムテープ』(1998年 リトルモア)、『encounter』(2005年 マッチアンドカンパニー)、『サナヨラ』(2006年 愛育社)、『Bonjour!』(2010年 マッチアンドカンパニー)『すべては初めて起こる』(マッチアンドカンパニー)など。



大森克己氏



佐内正史氏

写真を撮っている時に、少しの間だけでも未来に足を踏み込んで知らない場所へ行っちゃったりしている瞬間があるじゃない? ドキドキしたいんだよね。今回はそういう写真を選びました。作品を大きくすると見えてくることがあるけれど、ここにある応募作品にはその必要性は感じられず残念です。でも、タイトルにはおもしろいものがありました。「ただ、少し、ざわついている〜」というような感じ。そんなもんだらうという曖昧さがあります。でも写真が言葉の背景になっちゃうことがあるので、やっぱり写真をきちんとしてほしいですね。それから、プリントですが、こだわりを持ってほしいです。色とか奥行きとか質感が全然違ってきます。オブジェの作品もありましたがアート力が弱いですね。ものすごいジャンクか、ものすごいお金をかけたならおもしろいかな? 今回の選考は、未来や可能性を感じるようなストーンと心に響いてくるものを選びました。

佐内 正史 (さない まさふみ)

写真家。1995年度(第12回公募)写真新世紀優秀賞受賞。常に写真の時代をリードし続け、出版した写真集は多数。2002年に写真集『MAP』で「第28回 木村伊兵衛写真賞」受賞。2008年には写真集レーベル“対照”を立ち上げる。最新刊は『度九層』(どくそう)。現在、アストルティア内を精力的に撮影中。

自分自身の姿や身近な家族、友人の様子をやや距離をおいて眺めるような視点、あるいは動物園や水槽の中の生き物を淡々と撮ったもの、人気のない郊外の廃屋など、人と自然が接しつつ疎外し合う場所を撮ったものが目立ったような気もしますが、全体として大きな変化は感じさせません。冒険に出るのではなく、限られた世界の中で未知の視線やまなざしをなんとか見つけようとする焦りのようなものがより強くなっているようにも感じました。私が選んだ作品はそんな中でも自分を客観的に突き放して捕え、より大きな写真の歴史や写真が現代の中で持つであろう虚構性を巧妙に操作しながら独特のまなざしを得ることに成功しているものです。

榎木 野衣 (えのき のい)

美術批評家。1991年に刊行した最初の評論集『シミュレシオニズム』が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また主著『日本・現代・美術』では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた『戦争と万博』など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。



榎木野衣氏



サイクルが速いというか、直近の写真家のスタイルを真似したかのような作品、たとえば安村崇、武田陽介、佐藤華連、原田要介といった作家の上手なコピーが目についた。それから、標本箱のように、ルールを1つ決めてそれに従って写真を撮っていくスタイル。標本箱なら、ルールを決めただけで満足しないで、選り抜いた面白い標本を揃えて見せてほしい。今回は特にこの2点が目立った。応募者の写真の上手さの数だけ既視感があったので、今回は人とは違う視点から制作している作品を選んだ。その結果、一種人工的な作品が並んでいる。写真を見る・見られるというそのことを、人に迎合する意味ではなく逆算した上で、自分の写真を構成した作品である。この人は面白い、すごく個性的だというより、それぞれの作家の意図が伝わってきて理解できる、それはそれでひとつの実力と認めて選んだ。

清水 穂 (しみず みのる)

写真評論家。1995年頃より現代美術・写真、現代音楽を中心に批評活動を展開している。1995年『不可視性としての写真:ジェイムズ・ウエリング』で第1回重森弘隆写真評論賞受賞。主な著書に『写真と日々』(2006年)、『日々は写真』(2009年)『ブルラモン』(2011年、以上、現代思潮新社)などがある。現在、同志社大学グローバル地域文化学部教授。



清水 穂氏



ヒロミックス氏

過去に選出された受賞作品から影響を受けたものが多くあるように感じました。「写真」の範囲を超えデザイン重視のようなわかりにくい作品も増えています。見る人がどう思うか? を考えて作ることは大切です。良い写真が撮れる人はやはり人としてもバランスが良い人が多い。多くの大人達は次の世代(未来)を任せられる、精神的に大人の出現を期待しています。そして人類のより高いステップに必要な人材はやはり高次元のビジョンを持つ人。夢の大きな人を期待します。写真を学ぶ若者の写真が皆似てしまっているのはおそらく皆同じようなアート写真だけが教科書になってしまっているから。良い写真はあらゆるところで見つけることができるので、若いうちは視野を広く、アート以外の様々なものを見て独自の視点で学ぶことが大切です。多くの人が驚くような作品を待っています。

HIROMIX (ヒロミックス)

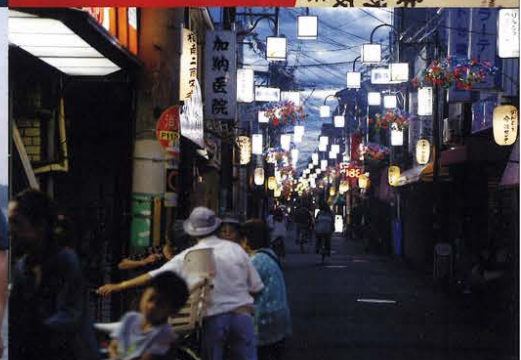
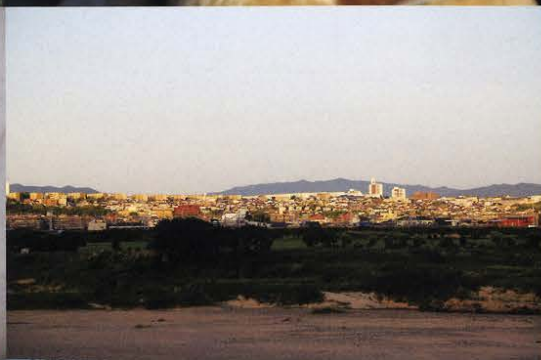
写真家。高校卒業後に応募した「SEVENTEEN GIRL DAYS」で写真新世紀1995年度年間グランプリを受賞。写真集『GIRLS BLUE』(1996)は写真界初の異例の部数を売上げ、自分撮りを流行させた。ガーリーフォトブームの先駆けとして、その後の写真表現の在り方に大きな影響を及ぼす。2001年、写真集『HIROMIX WORKS』で「第26回木村伊兵衛写真賞」受賞。2009年、個展「初音、心の輝き」、ショートフィルム「なんて素晴らしい君/HOW SPRENDID YOU ARE」他多数。



2013年度(第36回公募)グランプリ受賞

鈴木育郎 Ikuro Suzuki

「最果-Taste of Dragon」





2013年度(第36回公募)グランプリ受賞者

鈴木育郎 インタビュー

新作個展に向けて、架空の存在でありながらも私神として慕う「龍」を探しに旅に出た鈴木育郎氏。また、旅先で出会った魅力的な人々との出会いと別れを通じて表現された情熱的な写真の数々。鷹職と写真、両立させ得るそのバイタリティはどこから来るのか。写真への思い、写真集へのこだわり、自身の在り方についてお話を伺いました。

— 個展開催おめでとうございます。グランプリ受賞後、何か変化はありましたか？

新しい出会いがありました。見えていないけれども、見えているような、そういう瞬発力のような不思議な感覚があります。

— プリントが127点、ブックが52冊という見応えたっぷりの個展会場になりましたね。構成するにあたって何か工夫されたことはありますか？写真はどうか、自分がどうあるべきかということを考えました。世間一般で評価される写真とは？他の人が見るという状況がある中で写真とは？というようなことです。その中で、自分は作る側であり、見る側でもあったりする。俺の展示ですが、あそこまでまとめられたら俺自身がすごく悔しいんです。自分が見て、本当にやられたと思う写真を見せたかった。

— 「最果—Taste of Dragon」タイトルに込めた思いは何ですか？

龍は存在しているけれども、見えない人が多い。でも俺は見ていると正確に捉えているんです。今回の写真を見てもえればわかりますが、これは生物学的にもすごいことだと思います。星野道夫さんのように野生動物を撮っている人に近い理想の夢でもあります。今まで絵にしか描かれていなかったことを写真で表現したんです。俺のリアルはこんなことで、見たいから撮るんです。

— 「本」にするこだわりについて教えてください。

オリジナルプリントには興味がなくて、本が好きです。本を作るのは整理していく作業になります。撮った翌週に形にしていることもあれば、5～6年前から手つかずのものもある。自分が見たいということで簡潔しているのかもしれませんが、整理していくことが大事です。1種類の本を100冊作るのとは違って100冊の本を作るのは1冊の100倍の労力がかかります。撮った順に並べて流れを大事にしていく。入れ替えたところで、抜群によくなることはあまりないんです。ある意味、日記ですね。日記だったら日付は入れ替えられないですよ。

— 印象に残る被写体に会われていますね。被写体となる方との関係性で大事にされていることはありますか？

初めて会ったその瞬間から、この人は違うな、おもしろいなあ、いいやつだなあ、会えてよかったなあと思えるような関係性を大事にしています。お互いにそう思っているから写真が成り立ちます。なかなかそうピンとくる人はいないんですよ。今回の写真は、初めてデジタル一眼を使って撮りました。美術館に出展するということを意識して「展示用に撮らせてください」とお願いしたんです。展示する写真は、やっぱりそういうものだと思うので、あらたまって撮っています。別れ際に「今日が最後だから。」というような感じで、今まであがとうというような気持ちも込めて写真を撮ります。一瞬一瞬を大事にする思い、そういうことは実は忘れがちですが、でも俺は、その瞬間を少し客観的に見たい。写真を見ていると思い出せるんです。その場を目に焼き付けることよりも、写真に残したい。そういう写真が撮れる関係性が大事なんです。

— 食物の写真が多いですね。

食物は、作った人の経験、その食物自体が存在した歴史などがある。それにプラスしてオリジナリティのある背景が実にたくさんあります。見ていると腹が減るといこともおいしいというのも普遍的なことです。俺は、独自の舌があるし、食物に対しては、地元の浜松で24歳までいろんなところに顔を突っ込んで食べてきました。居酒屋なのにラーメンというのぼりが出ているだけで店に入って、店主の人と話したり、作り方を見たり聞いたりして、その上で食べてきた。俺の選びはマニアックすぎて、わかる人にしかわからないかもしれない。食うことにこだわっているし、行く店はこだわっている人が作っています。俺と同じような見識を持っている人を連れて行くとうまいといってくれます。でも店を見つけれられるかはわからない。俺は見つけようとするし、そういう風に動くし、歩きます。

— 鈴木さんにとってのこだわりとは？

自分でいいと思ったもの。イコールそれが正しいことであるかは自分がどれだけ感性をあげられるかということになるかと思います。

— どうしても押さざる負えないシャッターチャンスみたいなものはありますか？

理想のポイントはありますが、そこで押せるかというのは難しいですね。人と一緒だとカメラの存在を意識するし、生で見ているものには勝てないと思います。

その瞬間でなくても、その人がそこにいたということで写るものがあると思います。ベストショットでなくても写真をストレートに撮る。一番自分が見たいのはちよつとした仕草で、ポートレートはカメラ目線で撮りたいですね。写真を見た人がその人と目が合う。その人に見つめられているというのは写真家の世界に入り込めるし、その人を考えられるんじゃないかと思うんですよ。だからポートレートはタイミングよくちゃんと撮りたい。そうでなくちゃいけないと思いますね。

— これからもたくさんの人に出会って写真を撮っていかれるんですね。今後の抱負は？

知らない場所へ行って、いろんなものに出会ってワクワクしたいですね。写真も撮ります。今まで出会った人との関係も大事にしていきたいですね。でも、矛盾してますが、出会いの感謝を持ちつつも、時にはそれを忘れて自分の欲望に従いたいというのもある。そんな感じです。今の社会は絶望的ですが、かと言ってデモすることでもないし、俺一人が動いたところかどうかというのもあります。逃げていくということではなく、現在、俺の情熱が傾いてない以上、自分の心に従うしかない。ただ、ある意味、俺がやっていることもデモみたいなものです。写真ってこういうことだろう、俺の人生ってこんな感じなんだということです。ある意味、これを見ていいなと思う人は、自分の置かれている状況では見ることができない、気付けていない景色があるということだと思うんです。俺の写真は、理想としているものが写っています。それを見たいと思うんだったら、自分の置かれている環境を振り返ることができる。そうい

う風に俺は社会に対して投げかけているんですよ。
化学調味料の入ってるラーメンより、ほんとにうまいラーメンを探せよ、
食べよとか、ブルーベリーを枝からプチッと取って食べたことがあるの
かということなんです。そうすると山に行つて、田舎に行つて体験しな
くちやいけないよと言うような話になる。ただ撮ればいいということでは
なくて、そういう部分が大事だから、抑えておきたい。今のスタイル
のために、いろんな人に会って来ました。カメラを向けると撮らない
でくれといっていた人を撮れるようになってきたんです。いろんな場所
へ行って、人に会ってというようにやっていると本当に時間とお金がか
かる。でも俺は一人で、学ぶためにそういうことをしてきた。それを
やるしかなかったんだということなんです。

— ご自身をどんな人だと思えますか？

たぶん、吟遊詩人ですね。スナフキン、座頭一とか、そういう感じです。

— クールで寡黙な印象がある人たちですね。

俺が一人で歩いているところを見れば彼らに近い世界があると思いま
すよ。深さが違います。それは見た人にしかわからない。ホームレス
をはじめいろんな人を見てきたんです。

— 篤職は続けていきますか？

続けるしかないでしょう。篤じゃなくても稼げりやなんでもいいですけ
どね。食えりや、なんでもいいんです。身体を動かして帰ってきて、街
に繰り出して酒飲んでというような生活がいいですね。日本人だし、日
本の良いところに行きたいです。俺は地方の出だし、地元のすごさが
わかる。自分が本物だったらいろんな奴に会える。臭いことが平気で
言える世の中になつたし、そういう出会いと別れができる時間があるん
です。

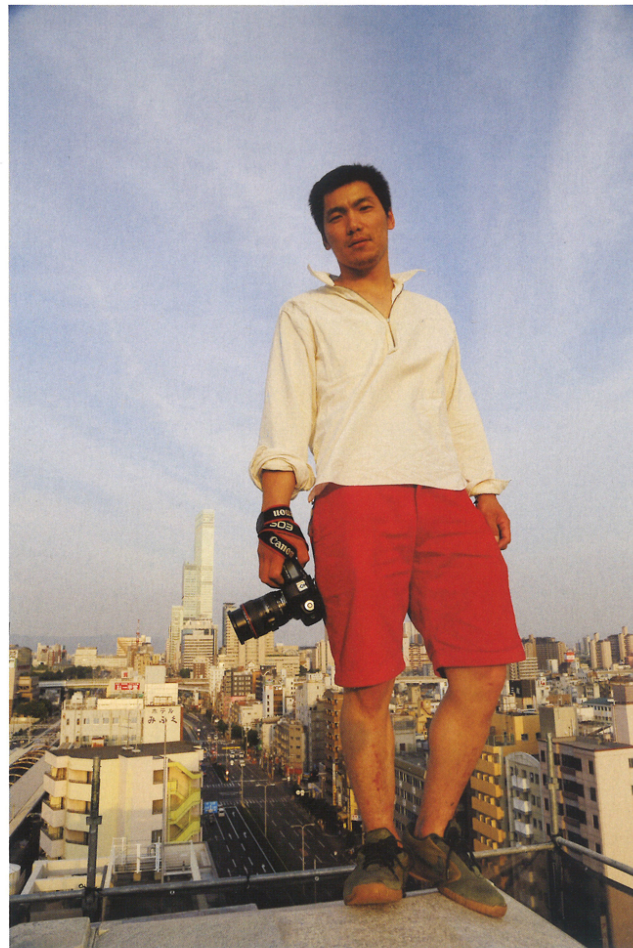
— 天にいるドラゴンが見守っているんですね。

俺の空ですよ。その世界観が俺の写真にあります。今回の個展は、こ
れまでにない歴史的な展示になつたと思えますよ。

— ありがとうございます。

鈴木育郎

1985年 静岡県浜松市生まれ。21歳より写真を撮り始める
2010年 舞踏家 吉本大輔氏のポーランドツアーに同行
帰国後より東京に移る
2012年 個展「月夜」新宿ゴールデン街 マチュカパー
2013年 個展「月の砂丘」蒼穹舎
2014年 個展「月夜」nuisance galerie



写真新世紀2014年度(第37回公募)

グランプリ選出公開審査会 報告

2014年度(第37回公募)グランプリ選出公開審査会が、9月12日(金)、東京都写真美術館1階ホールにて行われました。
応募者1,028名の中から佳作20名、優秀賞5名が選出され、グランプリは優秀賞受賞者5名のプレゼンテーションにより決定します。
今年度のグランプリ候補は、草野庸子氏、須藤絢乃氏、南 阿沙美氏、森本洋輔氏、山崎雄策氏の5名。審査会では候補者全員の
プレゼンテーション、審査員との質疑応答の後、別室にて審査が行われ、審査員の合議によって須藤絢乃氏がグランプリに決定しました。

開会

9月12日期待と緊張感が高まる独特の雰囲気
のなか審査会が開会しました。

まず審査員の大森克己氏(写真家)、佐内正
史氏(写真家)、権木野衣氏(美術批評家)、
清水穰氏(写真評論家)、ヒロミックス氏(写
真家)の5名が着席し、続いてグランプリ候補
者の5名(優秀賞受賞者)が緊張した面持ち
で登壇。その後、キャン株式会社 執行役員
野口一彦より開会の挨拶がありました。

プレゼンテーション

グランプリ候補者5名は、それぞれ持ち時間10
分の中でプレゼンテーションを行い、自らの言葉
で作品の背景や制作意図、作品への思いを語
りました。審査員からは、作品に対する賛辞や
鋭い批評、作者への質問などが寄せられました。

各候補者のプレゼンテーションと 審査員のコメント

草野庸子氏「UNTITLED」

この作品は、私が3年前に福島から上京してき
て、この3年間で楽しいことや悲しいことがあつ
たときに撮りためてきたものです。すべてコンパ
クトフィルムで撮っています。
展示した写真は、小さいものはA6から、大き
いものはA0まであり、サイズはバラバラです。
小さいものがよく見えなくて近づいてみたり、大
きいものを見るために遠ざかってみたり、何度も
同じ写真を見返して、見るたびに違うことを感じ
てほしいと思いました。写真新世紀には「写真
でしかできないことは何だろう?」というテーマが
ありますが、私が写真でしかできないと思うことは、
時間を止めてしまうことだと思っています。
友達と一緒に遊んでいても、「楽しい」中でファ
インダーを覗いているのは寂しいことでもあると
思います。自分の目で直接確かめて遊ぶので
はなく、カメラ越しに遊んでその場面を記録に
残す。しかもその1枚で真実がすべて見えてしま
うのはとても怖いことだと思います。それでも写
真を撮っているのは、家族写真をあつから見て
感じる喜びだったり、あつたことをできるだけ忘
れないようにするためです。みんなで「こんな



ことがあつたね」と思い返すのもいいし、まっ
たく知らない人が見て「こういう時代だつたんだね」
と思ってもらえたりするのは、写真にしかできな
いことだと思います。これからたぶん、私はそ
ういうふう撮り続けるのだと思います。
私は日常生活の中で不意打ちのようにいろんな
人の顔を撮るのが好きなのですが、そういう写
真を一生続けていきたいと思っています。被写
体との距離をどれくらい詰めることができ、被
写体の感情を組み入れた写真を撮っていき
るかに、これからもチャレンジしたいと思っています。

佐内正史氏

写真は、楽しそうで気持ちがいい。わりと隙が
あつて自由な感じがします。
展示方法については、最初見たときレイアウトし
ているのかなと思つたのですが、「見るたびに違
う感じになるようにした」と聞いて「そうだつた
んだ」と発見がありました。
話を聞いていると、自分の「写真の箱」の中
に集めていくことは時間を集めていくことでもあり
それが好きで、そういう宿命も感じているみた
いですが、思い出のために集めるということ、
写真を撮ることは、似ていてちょっと違うかもし
れない。そういうことも今後は考えることがある
かもしれないですね。

南 阿沙美氏「MATSUOKA!」

私が写真を撮る動機は、人が好きでことです。
人から出てくるエネルギーをほっとけない、何か
しなきゃいけないという気持ちになります。
去年か一昨年、駒沢通りを泣きながら自転車を
こいでいたら、中型犬の散歩をしているおじさん
がいました。犬はうんちをしていて、中型犬のう
んちをするときの腰の丸み、それがすごかった。
明るさというか、自分の気持ちに反して目の前に
現れてくる光景は無関係で、そのとき私はこれが
「正体かも」と思いました。自分は世界の中に
いるんだけど、自分と世界には何か間があつて、
その間にあるものがリアルなんだと思います。
ここ数年は、「アンチセンチメンタル」というか、
シンプルに「写真を撮りたい」と思っています。
感情はいやでもついてくるので、隠すわけでは
ありませんが、ベースにあるうえで、対象の魅
力にぎゅっと迫るものをやりたいと考えています。
意味から離れれば離れるほど写真になってい
くのではないかと思います。写真は心に作用す
るものなので、私が世界から受けてきたものを
写真によって跳ね返したいという気持ちで、写
真の力を借りて撮りました。
「MATSUOKA!」は、松岡さんとの関係を撮
ったものではなく、彼女の姿を借りて私が写真

でやりたいことをやった作品です。彼女は文句も言わず、やってほしいことは全部やってくれました。私を信用してくれたことを感謝しています。私が人を撮るときに意識していることは、「替えのきかなさ」です。彼女に似た人ではだめで、彼女のような人を探していたわけでもありません。彼女と出会って、「ああ、こういうふう撮りたい」と思い、彼女の魅力を借りて、発見して、一緒に動きながら撮りました。これは松岡さん本人ではなく、「MATSUOKA!」という写真だと思っています。

大森克己氏

まっすぐな写真で素敵です。(写っている)人物が魅力的で、生命力のある躍動感がとても美しい。モデルの松岡さんは才能があるんだな、と思いました。そして、才能のある誰かと出会うのも写真家の力だと思います。こういう機会であるからこそなのですが、松岡さん御本人を会場でお見かけして、写真から受ける印象と御本人の持つオーラが違う、ということも感慨深かったです。写真というものはファンタジーなんだな、



と改めて感じました。南さんは写真のことを一生懸命考えている人なんだと思います。(プレゼンテーションのスピーチを聴いて)写真と格闘している様子が分かってうれしかったです。願わくば、何か「秘密」のようなモノが自分の作品に内包されているということに確信犯であると、もっと良くなるかもしれない、と思いました。

須藤絢乃氏 「幻影-Gespenster-」

「Gespenster」とはドイツ語で「幻影」を意味します。この作品は、実在する16人の行方不明の女の子たちに私が扮したセルフポートレート作品です。彼女たちがいなくなってしまう後の喪失感を表現したくて、何もいない、誰も写っていない写真も作品の中に入れてあります。私がこのような写真を撮っていることを友達に話すと、驚かれるし、ときには批判されたり、怒られたり「殴りたい」と言われることもありました。偶然、今撮っている子が知り合いの娘さんだったということもありました。本当は身近にあった

ことなんだと思いました。けれど、今まではあまり話してはいけない事実というか、平凡な日常の中では話さないでおきたい事実なんだということがわかりました。彼女たちは探されているけれど、隠しておきたい、あまり明るみにしたくない存在なんだなということ、いろんな話から感じました。制作中は彼女たちの悲しい気持ちをどうしても考えてしまい、とてもつらかったのですが、やはり私には彼女たちの魅力、光を見たい気持ちがありました。谷崎潤一郎の小説「細雪」に、二人のドイツ人と日本人の女の子がシーツをかぶってお化け遊びをするシーンがあります。それは離ればなれになってしまう前日にお泊まりをして夜中じゆう騒ぐシーンで、「お化けと云う独逸語はゲシュペンステル」という会話があり、響きが気になって調べたら、お化けのほかに幻影という意味があることを知りました。離ればなれになる前のすごハイテンションな一夜は女の子にとって日常の中のきらめきの1ページだとすれば、行方不明の彼女たちも、いなくなってしまうその直前まできらめい



た日常を過ごしていたのだらうと思いました。私はいつもプリントの後、グリッターで装飾したりするのですが、今回はそれをやらないでおこうと思っていました。けれど、彼女たちだってやっぱキラキラしていたはずと思い、ほんの少しだけグリッターを施しています。かすかな光をみなさんに感じてもらいたい、日常の中で隠されてしまっていたり、見ないでおこうとされているものたちのかすかな光を受け取ってほしいと思っています。

榎木野衣氏 (質疑応答)

【榎木】行方不明者というのは、時として突然現れることがあります。そのことについてどう思いますか。
【須藤】もし帰ってきたら、私は本当に「神隠し」のようだと思います。出てきてほしいという気持ちはあります。
【榎木】指名手配のポスターなどでは、時間が経ちすぎていて、本人が写真の人物とはまったく違っていただけ発見できなかったという場合も多いと思います。彼女たちも、もしかしら、

本人とわからないまま、すでに身近にいるという場合もあると思います。そういうことについては? 【須藤】その子たちが身近にいることは考えたことがありませんでした。撮っているときは、もうこの現実世界にはいないような気持ちでした。
【榎木】行方不明という、我々にとって実は身近であるがあえて触れない領域、近いけれど遠い、その距離関係をうまくセルフポートレートに収めているという点が良かったと思います。ブックも、たいへんまとまっていたと思います。プレゼンテーションについても、被害者的な写真を撮っているのですが、それを追いかける者として加害者的な側面を自らのファッションで演じているのかなという感じもしました。

森本洋輔氏 「Yoyogipark, Shibuya-ku, Tokyo」

僕が初めて写真新世紀の展示を見たのは2006年の第29回で、友達が佳作を受賞したのでそれを見に来ました。特に喜多村みかさん



と渡邊有紀さんの作品が好きでした。女性が二人でお互いを撮りあっているのですが、自分の恋人の写真を見ているような感覚になってきました。二人いるので、一人に思い入れが強くなりすぎないところがいいと思いました。自分もこういうふうに女性を撮りたいと思い、翌年から写真新世紀に作品を応募するようになりました。僕は声をかけるとき、「写真を撮っているのですが、写真を撮らせてもらえませんか」とだけ言います。半分くらいには断られます。でも半分は撮らせてくれます。撮らせてはくれるけど、僕があまり事情を説明しないので相手は不審に思います。でも、写真に撮られるのだからと、女性はきれいに写ろうとします。その不安定な状態、悲しんでいるところは実際には見たくないけど、写真では見たいと思いました。その後、代々木公園、渋谷、原宿、新宿、下北沢、吉祥寺、上野と、たぶん600人くらい撮りました。なるべく自分がよく行く街を選びました。実家に帰省したときのような懐かしい感じのする写真が撮りたかったからです。いろいろな女性を撮ることで自分を慰めていたのだと思いま

す。一人に思い入れを強く持ちたくなかったので、たくさんの人を撮ってバランスを取っていたのかもしれませんが、彼女と似ている表情を撮ることで、彼女の続きを撮っている感覚になっていたのかもしれませんが。

ヒロミックス氏

森本さんの作品は、何気なくサラッとしているのがいいなと思いました。よく見てみると、女の子たちはみんな泣きそうな顔をしています。人々は孤独で、いろいろと大変な毎日の中にも、きれいに撮ってもらえる機会があったことに感動している、そんな顔をしています。声をかけて撮るのは結構労力があるので、バイタリティがないとできません。そういう作品は年々減っている気がします。童貞っぽさなのか、ナンパっぽさなのかわからないテイストもいいなと思いました。いろいろな雰囲気的女性が登場しますが、多様性を理解できていることも写真家になるポイントだと思っているので、視野が広いなと感じま



した。コミュニケーション能力も高く、それも写真家になりたい人には必須な資質で、見習うべきものがありました。

山崎雄策氏 (佐藤 愛)

ここに写されている女性たちは、すべて実在しません。これらは画像処理によって作られた架空の女性たちの写真です。佐藤愛とは、20~30代の女性に最も多い名字と名前を組み合わせたものです。素材は町で通行人をスナップショットで撮った写真です。基本的に4枚一組で、そのうち1枚は目線がこちらに来ています。その撮り方は、手を振りながらカメラを構え、通行人に近づいていきます。見るからに怪しいので、ほとんどの人は顔を伏せ、怒られたことも多々あります。逆にそれだけ目立つ方法で撮っていると、本当に撮られたくない人を撮らなくて済むというのと、1日に数千枚撮っていると、一人くらいはこちを向いて微笑んでくれる人がいて、そういう写真を撮りだめて素材として使っています。

この作品をどうやって見せるのが一番面白いかを考えたとき、僕はプロジェクターを選びました。プロジェクターは連続性のある作品を見せるのに適していて、見たこともないくらい顔を大きく見せることができます。大きい顔を見ることは「非日常」であり、何か新しい発見があるんじゃないかと思いました。この実在と不在の間を揺れるような作品が、プロジェクターに映っては消え、映っては消え、電源を切ると最後は白い壁になる。これは作品のコンセプトそのものだと思います。

清水 穰氏

顔の加工にそんなに時間がかかっていたとは意外でした。どこにもいない、けれどどこかで見たことのあるような顔というバランスを見つけるのに時間がかかったのだと思います。都市を行き交う実在する女性たちを、ゴルゴ13のように狙いすまして望遠レンズで撃ちぬき、こうしたシークエンスにする写真作家にベアト・ストロイリがいますが、そのパロディないしオマージュに見えなくもないですね。



撮影対象が女性ばかりということで、過去にストロイリもそれで批判されていました。既視感のあるものを撮ろうとすると対象が女性に偏ってしまうのは、写真史からすると仕方ない面もありますが、個人的にはいろんな対象に挑戦してほしいという思いもあります。

総評・榎木野衣氏

今日、改めて展示を見て、みなさんの作品には不思議と共通点があるように思いました。キーワードは、「幻影」です。草野さんの作品には、一日一日の刹那の中で、親しい友達なだけけれど、どこか他人のように過ぎ去っていく一瞬一瞬が散りばめられています。南さんの作品の、写真を使って何か得体の知れないものとぶつかっていくなかで架空の人物が作られていく、というところはまさに「幻影」です。森本さんの作品も、恋人の幻影を求めながら公園をさまよい、何百人に声をかけながらその影を追っている。山崎さんの作品は、町で拾い集めた顔の断片を粘土のようにこねて実在しない「佐藤愛」を

作り上げていくところが「幻影」であると思います。それを最も象徴的に示しているのが須藤さんの「幻影」でした。須藤さんがグランプリに選ばれた理由として、まず作品が非常によく練られていることです。また、行方不明という、我々にとって実は身近であるがあえて触れない領域、近いけれど遠い、その距離関係をうまくセルフポートレートに収めているという点。そして、森村泰昌氏やシンディ・シャーマン氏の作品との違いを自分の中できちんと整理できていることが良かったと思います。ブックも、紙の選択、印刷の仕方など、たいへんまとまっていたと思います。プレゼンテーションについても、被害者的な写真を撮っているのですが、それを追いかける者として加害者的な側面を自らのファッションで演じているのかなという感じもしました。プレゼンテーション、作品展示、ブック。三拍子揃って良かったと思います。行方不明の少女を26年間探し続けている人がいるように、重いテーマであることは重々承知だと思います。ここに踏み込んだ人は、何らかの



形でこれからも付き合っていかなければならないでしょう。そして、いずれは写真的な決着をつける発表をしていく必要があると思います。それも含めて今後の活躍を期待したいと思います。

表彰式

プレゼンテーションの後、別室にて約50分間の審査が行われ、グランプリが決定しました。表彰式では、佳作受賞者代表の中島由佳氏、続いて優秀賞受賞者5名それぞれに表彰状と奨励金の目録が授与されました。そして2014年度のグランプリが発表され、受賞者の須藤絢乃氏に表彰状と奨励金の目録、副賞としてキヤノンデジタル一眼レフカメラ「EOS 5D MarkIII」が贈られました。須藤絢乃氏は、「審査会では100%の力が出せるようにと頑張りましたが、やはり緊張してしまって、もっとこういうことも言いたかったという思いもあります。選んでいただき、本当にうれしいです。これからも、賞を取って成長したと言ってもらえるよう頑張って作品を作り続けていきます」と受賞の言葉を述べました。



2008年度(第31回公募)佳作受賞
山内 悠 Yu Yamauchi
「夜明け」





2008年度(第31回公募)佳作受賞者

山内 悠 インタビュー

富士山から捕えた宇宙の神秘ともいえるような美しい光景を写真集『夜明け』で発表した山内氏。この夏、山小屋の主の言葉を刻み込みながら文と写真で綴った『雲の上に住む人』を出版。自然と対峙しながら取り組んでいくスケールの大きな写真表現はどのようにして生み出されたのか?写真を始めたきっかけから、現在の活動までをインタビュー。

— 写真をはじめられたきっかけは何ですか?

中3の時にクラスだけの卒業アルバムを作ったのがきっかけです。写真を撮るのが本当に楽しかった。その思いは大学に入ってからさらに強くなり、爆発しました。ある時、ふと「撮った写真に責任を持ちなさい」という言葉がスコーンと入ってきて、それから撮りっぱなしの写真を見返す、山のように撮った写真と向き合う作業をはじめました。そして、処女作ともいえる一冊を作りました。

当時は旅に出たくて仕方がなく、でも自由な時間はあってもお金がなかった。そこでテレビで観ていたヒッチハイクの旅、僕もそうしようと思いついたんです。時間があればいつでも親指を立てて行きたいとこに行きました。気が付けば日本中を全て廻っていました。その旅での生き生きとした感じや満ち溢れたエネルギーが、普段の生活の中でギャップにも感じるようになり、ずっと旅の中の自分でいたいという思いが高まっていきました。海外へも出て行き、旅と日常の狭間を求めながら、叫んでいたような感じです。

— エネルギー全開ですね。その後は、どうされましたか?

当時はアルバイトでパーテンダーとして働いていました。僕には天職と思う程向いている仕事でした。お店も任されていたのでこうして飲食業で生きていくのだと考えていました。でも、お店や責任を抱えてしまうと旅には出られない。その息苦しさもあり、旅を中心に考えると写真で生きるしかないと思うようになったのです。

それから、写真で仕事をするというのはどういうことなんだろうと思って、知り合いのカメラマンを頼って上京してアシスタントをしました。その後はスタジオに入り、ここでは写真という仕事を様々なカタチで見せてもらったように思います。でも、そこで見た写真の仕事は僕が思っていた程の自由さはなく、どうしたらいいのかわからなくなり、一番きつかった時です。

次第に昔のように勢い良く写真も撮れなくなってしまい、それでもスナップばかりを無理矢理に撮っていました。それも一冊にまとめましたが、昔の自分を追いかけているようで、全然ダメでしたね。いよいよ動かなければと、また旅に出ようとスタジオを辞めました。バイトでもしてお金を貯めようと思っていた矢先に、知りあいから儲け話が転がり込んできて、もちろん巧くいくはずも無いのに乗っかってしまいました。結局借金を作ってしまったんです。

27歳、八方塞がりでした。そこからは、返済のために昼夜働きました。写真どころじゃない。そんな切羽詰まった中、バイトの帰りに二日連続で流星を見たんです。そこから流れが変わった(笑)。友達を通じて富士山での山小屋の仕事の誘いがあったのです!先の見えない状態だったので迷う事は無かったです。

ただの人間なんだ
写真家なんていう名刺の肩書きはなくていい

— 富士山の山小屋ではどんな生活をされていたんですか?

6月1日に食料を担いで雪で覆われた山肌を登ることから全てが始まり

ました。開山までまだ1ヵ月ある富士山7合目は、雪に覆われた世界でした。山小屋は雪に埋もれ、電気もガスも水道もない。そんな過酷な場所に来る日も来る日も雪をかき、雨水を集め、火を焚き飯を炊く、それらは、「生きる」という人間本来の営みそのものでした。これには充実感が在り、旅の中に在る自分を思い出しました。僕はこの「生きる」という本質的な感覚を探していたのかもしれませんが。雲海から上る太陽と、富士山の後方に光る月、そして自分が立っているのは地球。宇宙に漂っているかのような感覚を覚えました。太陽があり、月があり、地球があり、さまざまな星がある。太陽の光に照らされ目の前の雲が湧きあがり、雨が降り、それを今まさに集めて飲む。自分が息をしているのも全てはこの宇宙が完璧な調和を保ってつながっているからです。僕たち人間もまたその一部なのだ実感しました。写真で生きるかどうかなんて悩みは本当にちっぽけに思えました。山小屋で暮らすうちに色々な観念がそぎ落とされ、解放されていく感じがしたんです。そこから年間5ヶ月、延べ600日間をそこで過ごすことになりました。

— 生きているということを実感できる、すばらしい経験をされたんですね。そうですね。雪が解けた後の7、8月は登山シーズンになり、下界からどっと人が押し寄せてくる。でも山には予期できないいろんな厳しさがあって、山小屋は命に関わる意味深い場所になっています。主である関さんは、シーズン後も含めて5ヶ月間小屋を開けています。40年間もそれを続けていて、富士山で唯一自然エネルギーを使い、本当の富士山の姿や本来の富士登山の在り方を見せようと活動している人でした。

自分のエゴの固まりみたいな写真は、作品ではない

— 関さんとの出会いが、佳作受賞作「雲の上に住む人」に繋がったんですね。

翌年、僕はまた関さんに呼ばれて富士山で過ごす事になりました。その年のある日、関さんが倒れたのです。心臓の悪い関さんは苦しみもがいていて、急遽ブルドーザーに救助を求めて下山することになりました。女将さんは小屋に残ると言い、関さんも、山は人の命がかかっているから小屋をよろしくと言いながら下って行くという状況。それが遺言のようで、その瞬間、僕はこの人の写真を撮っていたのか?と思いました。とたんに頭をパイプで殴られたように自分は写真を撮る人で此処に居たのに何をしていたんだと。これまで、自分のエゴの固まりみたいな写真ばかりを撮っていて、それが僕の写真だったのか!とハッとさせられました。

— 伝えたい思いがあって、撮りたい被写体に出会ったということですね。人のために一生懸命生きている人がいる。俺はそれを見過ごしていただと気がついたんです。それからめっきり落ち込んで、写真なんかはやめてしまおうと思いました。そうしたら、おじさんは死ななかつた。それで、この人がこの小屋に居た証としての作品を作ろうと思って作ったのが『雲の上に住む人』です。情熱を全部注いで、そこからはそれ以外のことは何もせずに打ち込みました。完成した一冊は関さんの選

厩に小屋へ贈り、そのタイミングで写真新世紀に応募したら佳作に選ばれて本当にうれしかった。我欲やくらみなどを一切捨てて、真っ向な意味のあるこの写真の在り方は間違っていなかったんだって思えました。そして、そこからブレなければ大丈夫だと、迷い無く写真を続けることになったのです！

自分の意識を完全にはずしたところで『夜明け』は出来上がった

— 『夜明け』の作品はどのようにして出来上がりましたか？

東京の自宅で『雲の上に住む人』を制作した際に雲の写真を見ると宇宙を東京でも感じる事が出来たのです。この雲の上はそうだ宇宙だったと自分が立つ場所を捉える視点が大きくなりました。グーグルアースのように。これを多くの人に感じてもらいたいとそれから雲だけを撮るためにまた山に籠りました。次第にいつも向き合ってる光や宇宙、星や地球って何なのか？そういう探究が始まりました。そしてプリントしている時にたまたま逆さになって空が出てきて、それが地球に見えたのです。その時、こんな写真を撮ろうといった意識的なイメージを持つと作品が僕の枠に収まってしまう。この未知なる全てが織りなす自然を捉えるには、未知なる偶然を受け入れるという事が僕自身の枠を超越し、その探求にも答えが見えて来るのではないかと思いました。僕たちもその一部であるのですから。そしてすべて偶然に身を委ねて、自分の意識を完全にはずしたところで写真を撮ることにしました。フィルムもネガ、ポジ、モノクロとさまざまな種類のを袋に入れ、くじ引きみたいに選んで使いました。目の前に起こる現象とフィルムとの相性によってどんな写真ができるかが決まる。撮っている僕自身さえどんな写真になるのか分かりませんでした。こうして出来上がったのが『夜明け』になります。

— 出版後、精力的に各地で写真展を開催されていますね。

発表後にはすぐ震災もあり、僕たちは宇宙の一部であることを感じてもらうことがいま僕に出来る事だと思い各地で行いました。北海道で会場を探している時です。北海道に住む友達から偶然にも電話がかかってきました。彼は旅で出会ってから富士山で共に過ごし、富士山で出会った人と結婚していました。そしてなんと、いま子どもが生まれたというのです。僕は早速彼に会いに行き、その赤ちゃんと会いました。僕が彼に出会った奇跡。それがこの命の誕生という奇跡に確実に繋がっている事を実感しました。一気に、自分のこれまでの歩みをさかのぼり、その全てがいま目の前に在る命と繋がりました。それは、彼にも、その奥さんの歩みにも同時に繋がり、両親や先祖代々すべての奇跡の編み目を辿っていくと、この地球と太陽の奇跡的な距離、星の配列といった宇宙との関係性にまで至り、その宇宙と現在までの全部が繋がったのです。その瞬間のことです。後頭部の辺りがスポンと抜け、光に溶け込むような感覚になりました。これは体験と言った方がしっくりきますが、この世界は光によって完璧に出来上がっているんだということに行き着いたんです。そして、全ては光だったんだと気がつきました。僕は夜明けの光を撮り続けてきた。さらに、光を写し描くという意味のフォトグラフ、真実を写すと書く写真ではないか。そう思ったとたんに、余計にいまこの作品をたくさんの人に見せていきたい、ただ、見てもらえたらいい!と、思ったんです。

— 奇跡的な配列があるように、山内さんの写真活動も光に導かれながら進んでいるのかもしれませんが、ご自身の行動力が伴って、偶然を引き付け、夢を実現しているようにも感じられます。今年は屋久島でも、展覧会を開催されましたね。

8、9月に「夜明け」を展示しました。屋久島も富士山と同じような流れで通うようになり、此処も探究があり、ひらめきをもらえる場所です。3年前から誰もいない森に籠り、毎年一ヶ月以上を深い森の中で一人で過ごしています。毎日一人で歩いて歩いて歩き続けます。歩けば歩く程に心の深みに向き合うようになり、それはまた森の深みに対峙して行くのです。泡のように沸き上がる感情は僕自身を現実から遠ざけ、それを現実に戻すかのように様々な事が森では起こり、巨木と出会うのです。その現実の繰り返しの途中でどんどん湧いてくる心の何かを捨てて行く行為ではないかと思っています。現在はその中で撮影を行っています。この先に何かがあるのか。「夜明け」を撮影していた時は、意識はどんどん俯瞰して、外へ外へと行った先への探求だったと思います。現在の屋久島では意識はどんどん内に入って行って、心の探究を行っているのでしょうか。

— 『夜明け』に続く新作は、屋久島から生み出されそうですね。

ここから何かまたできそうな予感がしているんですよ。僕はいま写真は探究の道具となっています。真実を写す写真が探究の結果として見せてくれるまで身を委ねて取り組みます。

— 今後のご活躍が楽しみです。ありがとうございます。



山内 悠

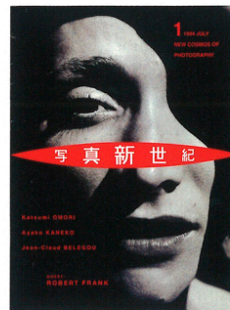
1977年 兵庫県生まれ。独学で写真をはじめ
2004年 スタジオアシスタントを経て、本格的に作品制作を続ける
2010年 写真集「夜明け」(赤々舎)を刊行。国内外で展覧会を続ける
2014年 書籍「雲の上に住む人」(静山社)を刊行。現在長野県在住

<http://www.yuyamauchi.com>

写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、1991年に年4回の公募で始まりまし。1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、37回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作品の展示や受賞者のトークショーでも多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

年度	応募総数	グランプリ	優秀賞	審査員
1992 第1~4回公募	483人	木下伊織	岩崎昌弥/小川嘉朗/奥谷佳子 オノテラユキ/今 義典/清水麻弥 辰本まこと/千葉鉄也 ノニータ(谷野浩行)/野村 浩/山本美奈	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)
1993 第5~8回公募	505人	市川綾子	遠藤年勇/大橋 仁/金城民子/河野安志 高橋ジュンコ/土井弘介/中山英輔 西 光一/野村 浩/宮本知保/茂木綾子	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)
1994 第9~10回公募	703人	熊谷聖司	大森克己/小倉英三郎/金子亜矢子 白土恭子/ジャンニクロード・ペレグー リン・デルビエール	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:ロバート・フランク(写真家)/坂田栄一郎(写真家)
1995 第11~12回公募	456人	ヒロミックス	A・R・T Puff/坂本 浩/佐内正史 柴原三貴子/野沢文字 パトリシア・ガバス/本田かな	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:ジャンクロード・ルマニー(仏国立図書館コンセルバトゥール) 浅葉克己(アートディレクター)
1996 第13~14回公募	587人	野口里佳	加藤直司/菅野 純/黒瀬英文/滝川実花 早船ケン/吉田 優/ロス・バン・ホーン	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:伊島 薫(写真家)/椎名 誠(作家)
1997 第15~16回公募	537人	矢島慎一	伊藤トオル/ヴァレリー・ブラン 慶/高城典子/山本 香/山本耕司	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:カシン・リー(写真家)/大森大道(写真家)
1998 第17~18回公募	771人	柏 亜矢子	池田宏彦/岩崎マミ/黒瀬康之/佐藤純子 ヴェロニック・ジリア/藤原江理奈/守田衣利	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:ベルナルド・フォコン(写真家)/ホンマタカシ(写真家)
1999 第19~20回公募	759人	安村 崇	伊賀美和子/遠藤礼奈/岡部 桃/田邊晴子 長尾智子/矢ヶ崎祐子/吉田 優	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:サラ・ムーン(写真家)/長野重一(写真家)
2000 第21~22回公募	944人	中村ハルコ	佐藤 篤/佐野方美/澤田知子/鈴木 良 谷口正典/中村年宏/山田大輔	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:横尾忠則(写真家)/倉石信乃(写真評論家) ジル・モラ(アートディレクター)
2001 第23~24回公募	881人	——	今井紀彰/佐伯慎亮/新沢もも たけむら千夏/中谷理子/中西博之 西郡友典/吉岡佐和子	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長) ゲスト:木村恒久(写真家)/都築響一(写真家)
2002 第25回公募	1,004人	吉岡佐和子	岡本英理/鍛冶谷直記 SABA(高橋宗正・中島弘至) ヨシダミナコ/吉本尚義	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:マーク・リプー(写真家)/東松照明(写真家)



年度	応募総数	グランプリ	優秀賞	審査員
2003 第26回公募	1,150人	内原恭彦	植本一子/加藤純平/藤田裕美子 法福兵吾/ヤマダシュウヘイ	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:マーティン・パー(写真家)/鈴木理策(写真家)
2004 第27回公募	1,087人	準グランプリ 川村素代 滝口浩史	おおば英ゆき/ふじいあゆみ/山下 豊	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:ケビン・ウェステンバーグ(写真家)/やなぎみわ(美術家)
2005 第28回公募	1,324人	小澤亜希子	新垣尚香/梶岡禄仙/とくたはじめ 西野壮平/林口哲也+松村康平	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:ウィリアム・エグルストン(写真家)/蜷川実花(写真家)
2006 第29回公募	1,505人	高木こずえ	喜多村みか+渡邊有紀/清水朝子 Palla/辺口芳典/山田いずみ	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:日比野克彦(写真家)/ボリス・ミハイロフ(写真家)
2007 第30回公募	1,277人	準グランプリ 黒澤めぐみ 託間のり子 中島大輔	青山裕企/田福敏史/中里伸也	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家) 南條史生(森美術館館長)/森山大道(写真家) ゲスト:榎本了亮(アートディレクター)/具本昌(写真家)
2008 第31回公募	1,517人	秦 雅則	岡部東京/小山航平/菅井健也 保谷綾乃/元木みゆき	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家)/南條史生(森美術館館長) ゲスト:榎本了亮(アートディレクター) 大森克己(写真家)/野口理佳(写真家)
2009 第32回公募	1,340人	クロダミサト	Adam Hosmer/杉山正直 高橋ひとみ/安森 信	荒木経惟(写真家)/飯沢耕太郎(写真評論家)/南條史生(森美術館館長) ゲスト:榎本了亮(アートディレクター)/蜷川実花(写真家)
2010 第33回公募	1,276人	佐藤華連	齋藤陽道/柴田寿美 高木考一/谷口育美	大森克己(写真家)/佐内正史(写真家)/榎木野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)/蜷川実花(写真家)
2011 第34回公募	1,305人	赤鹿麻耶	奥山由之/木藤公紀 パトリック・ツァイ/山田真梨子	大森克己(写真家)/佐内正史(写真家)/榎木野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)/ヒロミックス(写真家)
2012 第35回公募	1,325人	原田要介	柿田真吾/吉楽洋平 長谷波ロビン/浜中悠樹	大森克己(写真家)/佐内正史(写真家)/榎木野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)/ヒロミックス(写真家)
2013 第36回公募	1,114人	鈴木育郎	安藤すみれ/海老原祥子 水野 真/荻口雄也	大森克己(写真家)/佐内正史(写真家)/榎木野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)/ヒロミックス(写真家)
2014 第37回公募	1,028人	須藤絢乃	草野庸子/南 阿沙美 森本洋輔/山崎雄策	大森克己(写真家)/佐内正史(写真家)/榎木野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)/ヒロミックス(写真家)

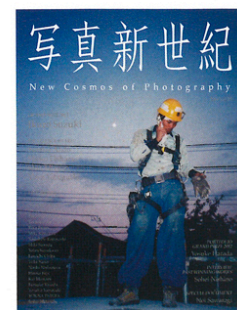
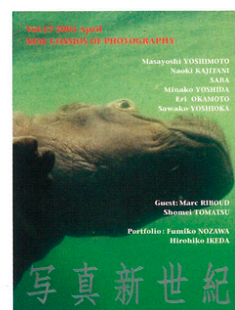
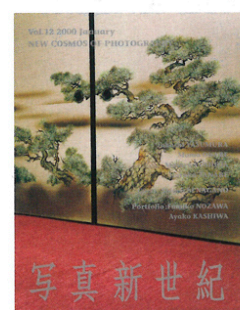
写真新世紀

写真新世紀第29号
2015年1月30日発行

発行責任者:キヤノン株式会社
CSR推進部 写真新世紀事務局
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
Tel. 03-5482-3904 Fax. 03-5482-5131
表紙:須藤絢乃「幻影-Gespenster-」より

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。
©2015 Canon Inc. All rights reserved.
非売品

PUB.NCP04 0130 GC07 Printed in Japan



Canon